

## ブロブディンナグ国の侏儒

97E009 萩原 智

私にとっての『ガリヴァー旅行記』とは、単にジョナサン・スウィフトの一作品というよりも、もはや彼の手を離れ『ガリヴァー旅行記』という名前の一人の人間と思える程の、強いエネルギーを持った作品です。『ガリヴァー旅行記』を読んで私は、「何という世界を覗き込んでしまったのだろう」と思うようになりました。この作品は、私に一個の人格とまで思わせる程に強烈な影響を与えました。

この作品には、ガリヴァーという、一つの人格が登場します。ガリヴァーは、彼が経験してきた様々な体験を、聴かせてくれます。この話は、ガリヴァーが航海の途中で出会った異文化体験の記録でもあります。そしてそこには、『ガリヴァー旅行記』の生みの親、スウィフトの人間観、そして私達人間への痛烈なまでの皮肉が込められています。彼の話聞いた後には、自分自身への、人間への疑問が生まれてくるでしょう。

私達は、毎日の生活で色んな物を見たり、聞いたりします。様々な情報が行き交う中、自分のアンテナが何をキャッチするかは、人それぞれで違います。それは、無意識のように見えて、実際は自分が興味を持っていることに関する電波を、意識的に選んでいます。周りを見まわして、もし、自分が興味を持っている所（例えば、自分の嫌な部分であったり、自分の好きな部分であったり、不安、楽しみ、様々です。）を持つ人がいれば、そこに興味が向きます。『ガリヴァー旅行記』にもそれは言えます。私は、この作品の中で、ガリヴァーのほかに登場する、ブロブディンナグ国の侏儒に強く引きつけられました。もちろん、この作品の読者の中には、もっと違うところに興味を持つ人もあるでしょう。リリパット国、フウイヌム等。どこに興味を持つかは、人それぞれ、そのとき何に興味があるかによります。そして、それが当然であると思います。

さて、侏儒が登場する舞台となるブロブディンナグ国は、農業を中心とした平和な国のようで、人々は、毎日農作業に精を出しています。その国の人間はとにかく巨大で、どのくらい巨大かというと、ガリヴァーが、「地上から60ヤード以上も高い空中に撮み上げられ」(p.112)とか、「60フィート以上もある人間」(p.206)と話しているように、彼らの身長は18メートル以上あるということです。そして、その国で侏儒と呼ばれている男を、ガリヴァーは、「30フィート近くはあった」(p.137)と話しています。つまり、彼の身長は約9メートルということになり、成人したブロブディンナグ人の約2分の1ということになります。この、私が強く引きつけられた侏儒は、このような世界に住んでいます。

この侏儒は、私の中の嫌な部分を持っています。彼は、ブロブディンナグ国で最も背の低い人間で、それが王妃に気に入られ、王妃からの寵愛を受けるに至りました。彼にしてみれば、今まで背が低かった事で、子供の頃から虐められたり、からかわれたりしたでしょう。彼がいつ頃から王宮に住むようになったかは定かではありませんが、王宮に住むようになる、それまでは、自分の運命を呪ったでしょう。自分という存在に嫌気がさすこともあったでしょう。しか

し、王妃の寵愛を受けるようになってからは、今まで嫌だった身体が、初めて自分の役に立ちました。彼はそこで、人に必要とされる快感を、生まれて初めて覚えたのではないのでしょうか。人間、他人から必要とされたり、認められたりすると、悪い気はしません。むしろ小躍りしたくなる気分です。私達も、日常生活で人から何か頼みごとをされたり、人から頼られたり、仕事で正当な評価を受けたりすると気分が舞い上がったりの経験をしたことがある、もしくは、そんな気持ちになったことがあるはず。少なくとも私はそんな気分になります。ましてや、プロブディンナグ国の王妃から寵愛を受けることになり、今まで差別されてきたであろう彼のことで、その喜びは、私達のそれとは、比べものにならない程大きなものだったでしょう。それが、道化としての存在だとしても、彼には人から求められるという快感の方が大きかったです。彼は、一般人では到底得ることのできない、王妃からの寵愛と、王宮に住むという、これ以上ない優越感を得ることができました。現代で例えるなら、ブラウン管の中の憧れのひとと恋仲になったり、ホワイトハウスや、皇居に住むようなものでしょうか。侏儒には、今までばかにした者たちを見返す意味もあったでしょう。彼には、この時期が人生で一番幸せな時だったのかもしれない。そう、ガリヴァーが現われるまでは。

ある日、人生の春の中にいた彼の前に、ガリヴァーという自分よりも遙かに小さい、自分の手の平程の生き物が現われます。驚くほど小さい人間がいるという噂を聞いた王妃が、王宮にガリヴァーを呼んだのでした。そのガリヴァーという生き物は、どこで仕込まれたのか言葉も話しました。それに、恭しくお辞儀もするほど礼儀作法も身に付けていました。これには王妃も驚き、すぐさま主人である農夫からガリヴァーを買い取りました。彼は、たちまち王宮で人気者となり、侏儒も早速その生き物を珍しげに見に行きました。最初の内、彼は、王宮にやって来たガリヴァーを見て、「ほう、何と小さい奴だ」と思ったに違いありません。そして、驚きと喜びが混じった複雑な気分だったのではないのでしょうか。その驚きよりは、王宮内の他の人達よりも大きかったでしょう。存在しないと思い込んでいたはずのモノが、存在したと知ったのですから。大袈裟かもしれませんが、死んだはずの人が生きていたと知った時の気持ちに近いかもしれません。それに、優位な気分でした。何故なら、自分より背の低い人間がいた、自分より下がいたという気持ちがあったからです。侏儒は、自分でも遙か下に見下ろせる小さな人間を見て、急に生意気になってしまいます。無理もありません。自分より小さい人間など存在しないだろうと思っていたからです。あるいは、そう思いたかったのかもしれませんが。そこには、今まで自分を虐めた人達と同じ気持ちがあったでしょう。彼には、王妃の寵愛を受けているとはいえ、やはり身長に対するコンプレックスがあったのです。

私達も経験があるはず。例えば、テストの点数が悪くて落ち込んでいたけれど、自分より悪い点数の人がいて、妙な安堵感を覚えたり。私達は、常に人と比較して自分の相対的な位置を知りたがります。その位置が高い、低い、もしくは、勝った、負けたで優越感を保とうとします。人間や動物は、劣等感と優越感が入り混じった複雑な存在です。とりわけ、私達人間は、知能が発達している分、より複雑と言えるでしょう。侏儒の優越感を満たしていたものは、王妃からの寵愛でした。そして、ガリヴァーの登場により彼の劣等感、優越感に変わるはずでした。侏儒にとって、ガリヴァーとは、もしかしたら最大の優越感を与えてくれる存在だったのかもしれない。彼は、ガリヴァーに対してよく威張り散らしていましたし、「なんて小さい奴だ」(p.142) 等と毒づいたようです。

ところが、彼が今まで王妃から一身に受けてきた寵愛の座は、突然現われたガリヴァーに、

あっさりと奪われたのです。彼に最高の優越感を与えてくれるはずだったガリヴァーが、逆に彼の喜びを奪う存在になろうとは、夢にも思わなかったはずです。芸や知識、話術など人を楽しませるような後天的な技能、知識なら、努力してガリヴァーに代わり、寵愛を取り戻せたかもしれません。しかし、王妃は、背の低さを求めているのです。身長は、努力しても縮みません。身体的特徴のような先天的なものは、努力ではどうにもなりません。彼らの時代は、現代のように整形して鼻を高くしたり、一重瞼を二重にとか、そのような技術はありません。もはや、侏儒では王妃の要求に応えられないのです。彼は、深い絶望に打ちひしがれたでしょう。最初の内は、「な～に、ガリヴァーなどにはすぐに飽きて、王妃様は俺の方を必要としてくださいささ」と思っていたかもしれませんが、しかし、待てども待てども、王妃からのお呼びが掛からない侏儒は、次第に焦り出します。その時の彼の気持ちはどのようなものだったのでしょうか。平安の世、帝や殿上人が、夜な夜な女性の家に出かけていた時代。彼らの寵愛を受けていた女性は、ある日突然、彼らが自分の許に来なくなり、彼らが別の女性に夢中でそちらの方にばかり行くようになった事を知った時、どのような気持ちだったのでしょうか。侏儒と同じような気持ちだったに違いありません。それは、平成となった現代でも変わらないように思えます。

ある食事の時、彼はガリヴァーに悪戯をします。その日は髓骨が食事のメニューでした。王妃は中身をほじくって食べ、骨を元通り大皿に戻して立てました。そして、ガリヴァーの世話役の女性グラムダルクリッチが席を外します。日ごろから悪戯の機会を窺っていた侏儒は、これ幸いとばかり、ガリヴァーを掴み上げ、足を絡み合わせて、髓骨の穴に腰がすっぽりはまり込むくらい押し込みました。幸いなことに、高貴な方々は、めったに肉類を熱いまま食べないので、ガリヴァーの足は火傷を負うこともなく、衣類が汚れるだけで済みました。王妃はすぐにも彼を免職にしようとしていました。しかし、ガリヴァーが間に入って取りなしたので、彼は手ひどく鞭で打たれただけで、それ以上の罰も受けずにすみました。ガリヴァーにどのような意図があったかはわかりませんが、侏儒の方は、よりによってガリヴァーに助けられたという思いではないでしょうか。宮廷から追い出されるのを免れたとはいえ、彼の性格上、ガリヴァーに対しての感謝の念はあるはずもなく、逆にガリヴァーに対する憎悪が増したのではないのでしょうか。

その後、少々悪戯に懲りたのでしょうか、彼は大胆な行動に出ることは無くなり、ガリヴァーにとって平和な日々が続きました。といっても、口喧嘩は頻繁にあったようで、彼らの仲は今まで以上に悪くなっていました。しかし、ある日のことです。よほどガリヴァーに対して鬱憤が溜まっていたのでしょうか、またもや食事の際なのですが、彼は、ガリヴァーの言ったことが気に障ったらしく、急に怒り出し、王妃の椅子の肘の上によじ登って、椅子にのんびり腰をおろしていたガリヴァーの腰のあたりを掴みました。そして、クリームの入っていた大きな銀の鉢に投げ込み、その場から逃げていきました。ガリヴァーは真っ逆様に鉢の中に落ちましたが、泳ぎが得意だったので溺れませんでした。しかし、泳ぐのが苦手だったなら、危うく一命を落とすところでした。それでも、グラムダルクリッチが助けに駆け寄ってきて、鉢の中から摘み上げたときには、ガリヴァーはクリームを1クォート以上 (p.143)、つまり、1リットル以上も飲んでいました。王妃は余りのことにびっくりして、目の前で起きたことに動転してしまいました。侏儒は、罰として鞭で打たれ、ガリヴァーを投げ込んだクリームの中身を全部無理矢理飲まされました。この事件で、彼は王妃の寵愛を完全に失う羽目になり、以来、彼は宮廷から姿を消しました。「これは私にとって誠に有難いことであった」(p.144) とガリヴァー

が言っている通り、彼にとってまさに厄介払いができたようなものです。しかし、侏儒にとっては取り返しがつかない羽目になってしまいました。全くもって、惨めな結末です。

侏儒にしてみれば、初めはただ、ガリヴァーが王宮から出ていってくれればいいという軽い思いだったのでしょう。しかし、焦りや不安、絶望感から嫌がらせはエスカレートし、この国から追い出そう、あわよくば殺そうとします。ガリヴァーが居なくなれば、自分はそのあの幸せだった頃の生活に戻れるとの思いがあったのでしょうか。しかし、侏儒はその度に王妃からきつい罰を受けて自らを追い詰めていき、ついには、永久に王妃の寵愛を失うこととなります。けれども、そんな行為に及んだ彼の気持ちが、私はなんとなく解かるような気がします。自分の地位や名誉、居場所を脅かしたり、奪おうとする存在が現われれば、誰もが強烈な拒否反応を起こすはずです。それは、当然の反応だと思えます。ただ違うのは、彼の場合は、嫌がらせをした、という結果だけでした。

王妃という後ろ盾を失った彼に対して、周囲の対応は、冷たいものだったでしょう。その後、侏儒は、ある高貴な婦人にお下げ渡しになります。彼は、その婦人にひどく喜ばれたはずですが、娯楽の少ないであろうその時代から見れば、婦人の喜びようはもしかしたら王妃よりも大きかったのではないのでしょうか。そして、とても大事にされたはずですが、しかし、彼にとっては王妃でなければ納得がいかないのです。そう、それはまるで、「東大」というブランドにこだわる若者、「グッチ」、「シャネル」といった高級ブランドにこだわる若い女性と同じで、彼は、「王妃の寵愛」にこだわったのです。それは麻薬と似ていて、王妃の寵愛という最高の名誉を得た彼には、王妃か、王妃以上からの刺激を受けなければ満足できなくなったのでしょうか。

プロブディンナグ国の侏儒は、こんな自分になりたいと思いながら、それとは違う現状に苛立ち、もがいている自分自身と重なって見えました。彼は、自分が幸せになることに必死で、周りに関心が向かなかったのでしょうか。それは、他人を知るといふ事、受け入れるということ。彼は自分を愛していなかったのでしょうか。そして愛されていることに気付かなかったのでしょうか。侏儒は、私の醜い部分です。できれば、外に出したくない部分です。けれども、誰もが彼のような気持ちを持っているのです。しかし、そんな侏儒を私は、とてもいとわしく思えます。何故なら彼の善い所、悪い所全てひっくるめて私という存在の一部分だから。

侏儒は、ガリヴァーという異文化に触れました。異文化体験というと、外国とか外国人との交流のように思えますが、本当はもっと身近にあるものだと思います。人間誰でも自分文化というものがあります。だから、普段の生活の中に、異文化体験は溢れています。異文化体験に必要なのは、まず相手を知ろうとすることだと思います。そして、それは自分を知ることにも繋がってきます。『ガリヴァー旅行記』からは多くのことを学び、気付かされました。この作品を、もっと多くの人に知ってもらい、自分自身について考えてほしい。そして、もっと自分自身を正しく愛することを学んでいくべきだと思います。

## テキスト

ジョナサン・スウィフト作、平井正穂訳『ガリヴァー旅行記』岩波文庫、1980年。

(レポート指導教員 北垣宗治)